

# 米欧亜回覧

第57号  
発行

特定非営利活動法人

米欧亜回覧の会

編集

広報メディア委員会

## 新年懇親例会はオランダをテーマに 十二周年記念パーティーとして開催!

恒例の新年懇親例会は一月十九日(火)午後六時半より、日本プレスセンタービルの十階、レストラン・アラスカで開催される。当会では毎年、岩倉使節団が訪れた国を一ヶ国づつテーマにして行ってきたが、二〇一〇年は十二カ国目のオランダとなる。そこで、米欧諸国を一巡したということと、今回は、十二周年と銘打って盛大に華やかに催したい。

米欧諸国との交流はむろん幕末の和親条約締結が契機だが、周知の通りオランダだけは特別で一六〇九年に平戸の商館開設で始まっている。平戸藩



ハーグの王宮 (『実記』)

主松浦鎮慎(法印)が港を開いたのが始まりである。そこで今年はとくに平戸藩主のご子孫を招き、オランダからは駐日大使、公使を招聘し、さらには岩倉使節団のご子孫も参席いただき、日蘭交流四〇〇年の歴史に思いを馳せようという企画である。おそらく歴史絵巻のようなパーティーになるものと期待されるので、ご家族も含め多数の方々が賑々しく参加されることを願っている。

### 建国六〇周年を迎えた中国 一〇月全体例会、国分良成氏が講演、盛況!

一〇月の全体例会は、会務報告のあと、第二部として慶應義塾大学教授で中国問題の権威、国分良成先生をお招きし、「建国六〇周年を迎えた中国」という演題で講演をいただいた。世界の超大国として躍り出た巨竜中国について、これまでと現在、そして今後についても、質疑応答を加え三時間半にわたって縦横に語り、補助席まで



10月全体例会 (国際文化会館)

出る盛況ぶりです。参加者に大なる感銘を与えた。

(詳細は二一・三頁)

### 多彩な会員の寄稿、続々...

好評の会員による寄稿を、今号も掲載している。まず、三原浩氏の研究による、「岩倉使節の帰国はどう迎えられたか?」、いまままで不明だった神戸や横浜の歓迎状況が明らかにされた貴重な記事である。また、アルゼンチンに留学経験があり仕事上も趣味上も船に詳しい藤原宣夫氏ならではの「エッセイ」。「アルゼンチン海軍と日本海海戦の勝利」も大変興味ある内容となっている。(詳細は四・五頁)

さらに、部会報告欄の、「デジタル実記」に挑戦する鶴飼直哉氏のユニークな研究「久米邦武の恍惚度指数?」も興味津々... (詳細六頁) ぜひご覧ください!

この百五十年ばかり、日本はかつてない大変化の時を体験してきた。そのトリガーになったのは技術の驚異的な進歩であり、その応用としての著しい経済の発展だった。その最も象徴的な技術は、かつては腕や脚に代わる機械と蒸気や内燃機関だった。そしてこの数十年は脳に代わるコンピュータの出現であり、その応用によるIT技術の発達であつた。その結果として知識・情報の爆発的な増殖が起こり、我々の生活は様変わりを起し、その対応に翻弄されている。日本のバブル以降の迷走二十年はその表れとみえる。

## 今、求められる「哲学とビジョン」

泉 三郎

い。日本は世界でも欧州諸国と並んで最先端の成熟社会に達しており、新しいモデルを創り出さなくてはならない立場にある。人類が獲得した神をも欺くばかりの技術と経済の仕組みをいかに制御し、人類が等しくよく生きるために活かしていくか、その課題に挑戦していかなくてはならない。そこにはどうしても二十一世紀のグローバルに通じる「哲学」とその具体的な展開としての「日本のビジョン」が求められる。

幕末維新期の日本は、一八五三年のペリーショック以来、西洋近代文明の大波に襲われて、以後約二十年迷走を続けた。そして、岩倉使節団の米欧回覧の成果として、一八七三年に大久保政権の樹立があり、新しい路線を敷くことが出来た。その時代にはモデルとすべき国があり、「東洋の英国」になるという具体的なビジョンを描くことができた。しかし、今の日本にはどこにもモデルになる国はない。

二千年も前に、老子、孔子、釈迦、ソクラテス、キリストなどの哲人や宗教家によって生みだされていく。この哲学と現代の技術、経済をどう組み合わせるべきか、それが今、われわれ日本人に課された最も重要な課題ではないのか、その思いが強くはない。

第53回  
全体例会

現未来部会担当の講演会  
建国六十年を迎えた中国

講師は国分良成氏

第五十三回全体例会は十月十八日(日)、国際文化会館講堂において開催された。出席者は六十一名。

十三時三十分より始められた第一部全体例会においては、まず泉理事長から現況報告をかねた挨拶があり、つづいて各部会報告が行われ、実記を読む会、小野、歴史部会小野、現未来部会、西井(正)、英文実記を読む会、岩崎、グローバルジャパン研究会、石垣、メディア委員会、中山、総務部会、山田、の幹事各氏より活動状況について簡潔な報告があり、また、泉氏より会員、西井易徳氏の近著「西井格太郎の生涯」が紹介された。



講演する国分良成氏

小休憩の後、現未来部会の塚本弘氏の司会によって第二部の講演会が行われた。今回のテーマは「建国六十年を迎

えた中国」、講師は慶應義塾大学法学部教授の国分良成氏。現代中国の最高権威から現状分析を伺えるところであって、会員はもとより、研究者・学生の参加もあり、会場は補助椅子を出すほどの盛会となった。すばらしい内容(講演要旨は後記)の講演の後、活発な質疑応答があり、予定していた時間を大幅に超える充実した講演会となった。

講演要旨

終了後、同会館セミナールームにおいて懇親会が行われ、講師を含め二十六名が参加、和やかに歓談、楽しいひと時を過ごした。

現状をどう見るか。一九二〇年代にも繁栄はあった?

歴史を語るときには、今の視点で投影されがちだ。建国六十年を迎えた中国は、中国共産党によって、一つの勢力、すなわち、外国勢力と封建勢力の排除に成功し、勝利を収めたと考えられている。この共産主義革命の起点は、一九一九年の五四運動(ヴェルサイユ条約の結果に不満を抱き、五月四日に発生した反

日・反帝国主義の大衆運動)とするのが一般的だが、近年、こうした共産党中心の史観に對し、見直しの動きも出てきている。例えば、確かに現在の中国は豊かになったが、一九二〇年代の上海も、相当な繁栄を誇っていたのではないかと議論がある。

一九一一年の辛亥革命を経て、孫文や袁世凱らにより一九一二年中華民国が南京において成立した。当初は孫文らによって、憲法に基づく政治を目指したが、結局は専制体制が袁世凱の死まで続いた。しかし、その間にも責任内閣制の導入の動きなど民主的な動きも見られた。特に孫文が三民主義を唱え、「国民政府建国大綱」を発表したことは、西欧とは異なる形で、中国において民主主義をどう進めていくかという点で大きな影響があった。すなわち、この大綱では、当面は「軍政」を行うが、そのうち、党が中心となる「訓政」さらには、憲法を基本とする「憲政」に移行していく三段階の民主化への発展のプログラムが明確にされている。

一九二八年に北伐を終えて、蒋介石の率いる国民党が実権を握ったときも、この考え方を尊重し、訓政(中国国民党が指導的立場に立つて国家を運営する)を行い、さらに、

一九四八年に制定された「中華民国憲法」により、選挙が行われるという「憲政期」に移行した。こうした史観は「中華民国史観」と呼ばれ、共産党以外にも中国の歴史の進展はあったとする考え方もある。歴史をいかに評価するかという問題は、結局、批判をきちんとするかということだ。ソ連では、スターリンの死後、激しいスターリン批判があった。しかし、中国では「スターリンは過ちもあつたが、功績もあつた」という見解。毛沢東についても、七割肯定、三割否定という七・三史観。しかし、私はこうした考えはおかしいと中国でも主張している。すなわち、スターリンの独裁を生んだのは個人の問題ではなく、政治体制であり、一党独裁体制がその要因。「文化大革命」を生んだのもこうした体制のためだ。この反省がないと本当の民主化は定着しない。今の中国では、歴史教育といつても、抗日戦争の教育で、文化大革命の問題点などは若い人たちに全く伝えられていない。こうした問題点を指摘する人はかなりいるが、残念ながら出世していない。もちろんインターネットでも、体制批判の議論はたくさん出ているが、本当の自由な批判は未だ認められていない。

一九四八年に制定された「中華民国憲法」により、選挙が行われるという「憲政期」に移行した。こうした史観は「中華民国史観」と呼ばれ、共産党以外にも中国の歴史の進展はあったとする考え方もある。歴史をいかに評価するかという問題は、結局、批判をきちんとするかということだ。ソ連では、スターリンの死後、激しいスターリン批判があった。しかし、中国では「スターリンは過ちもあつたが、功績もあつた」という見解。毛沢東についても、七割肯定、三割否定という七・三史観。しかし、私はこうした考えはおかしいと中国でも主張している。すなわち、スターリンの独裁を生んだのは個人の問題ではなく、政治体制であり、一党独裁体制がその要因。「文化大革命」を生んだのもこうした体制のためだ。この反省がないと本当の民主化は定着しない。今の中国では、歴史教育といつても、抗日戦争の教育で、文化大革命の問題点などは若い人たちに全く伝えられていない。こうした問題点を指摘する人はかなりいるが、残念ながら出世していない。もちろんインターネットでも、体制批判の議論はたくさん出ているが、本当の自由な批判は未だ認められていない。



懇親会の国分氏(国際文化会館)

富強大国|中国の課題|民主化

ソ連の共産党は七十四才の寿命で滅んでしまったが、中国共産党は、「富強大国」という二十世紀中国の夢を遂に実現してしまったようだ。今や、銀座に行くと、人口の数百パーセントぐらいの富裕層の中国人や台湾の人が数多くいて、この人たちのおかげで景気が支えられているところがある。

鄧小平は、ソ連の崩壊から学んだことは、二つと云っている。一つは、国を外国資本に向けて開かなかったこと、もう一つは、自己改革をしなかったことだ。この学習の結果、とにかく、党が権力を握りながらも、市場経済化を進めていくことが大事ということになった。経済成長があつてこそ、政治が安定するということこそを中国の指導者は十分

認識している。次の課題は、「所得の再分配」だ。これから、本物の「民主制」をいかに進めていくかが最大の課題といえよう。私有財産権については、二〇〇四年の憲法改正で一部認められている。また、株式についても、かなり自由化されている。こうした形で、市場経済化を進めているが、あくまでもそれは資本主義ではないという立場だ。今後の民主化の第一歩は税制改革。ただ、現状では、相続税はない、また資産公開も累進課税もやっていない。個人や中国の会社からの徴税は少なく、税収の多くが外国企業からの税金である。この構造は、いつまでもは無理と分かれはじめている。ただ、既得権益を有する人々にどこまで所得の再分配を受け入れさせられるかが、中国が、真の民主国家に成りうるか否かの試金石となる。

実際、多くの国有企業のトップは、党や軍の幹部が占めており、共産主義の本来的である人民の平等など全く省みられない。富の分配の不公平さは中国でもかなりオープンな議論が行われており、清華大学の教授があるセミナーで、「南アフリカの差別」と中国の差別は全く同じというテーマで地方の中国の人々の貧しさに言及した

例もある。私自身もこうしたことをしゃべると、なかなか自分たちでは言えないからと、歓迎されるようなこともある。

**米・中関係**

GDPで第二位の大国になりそうではあっても、アメリカとG2時代になるという意見には、中国指導層は反対の立場だ。まだまだアメリカとはあらゆる面で差がありすぎるとい認識。鄧小平の「滔天光養晦」(自分が弱いときは、じつと我慢して頭を上げな、強くなつてから上げる)という教えを守ろうとしている。他方、アメリカの方は、国債を大量に買ってもらい、ドルの下落を防いでもらっているという弱みがある。

チベットの問題で米億ドル、ウイグルの問題で米国議会が騒ぎそうになると、また千億ドルの国債の購入で黙らせてしまった。軍事面で、航空母艦を建設するとの話もあるが、ただ、アメリカから見ると、空母だけあつたとしても、これを支える哨戒艇、駆逐艦などあらゆる面で近代的装備とシステムが揃っていないと本当の脅威とはいえず、まだまだ、格段の差があるという見方だろう。

米中の最大のテーマは台湾だ。今後、二〇一一年から二〇一二年にかけて、中国が何

を台湾に求めていくかが極めて注目される。単純な統一ということはない。相当に開明的な中国の人々が何らかのタマを投げってくるだろう。

**日中関係**

日本と中国、GDPでは抜かれるかもしれないが、まったく違う国。日本は既にあらゆる意味で先進国の一員。中国は、規模こそ大きくなったものの、まだまだ国内全体の格差が大きく発展途上の国。東アジア共同体、鳩山首相は中国に喜ばれると思つて言ったかもしれないが、中国としては、今や、むしろ、世界全体の中でどんな立場をとるか

が関心事。もちろん、東アジアは重要で、その中で特に人民元の国際化は進めたいと考えている。他方、日本が東アジア共同体を言い出して、再び軍事大国化が台頭することを恐れている人も一部にはいる。日本脅威論だ。そんな風に日本の力を買って買っているのは、過大評価だ。また、日本の産業の競争力には、アニメなども含めて大いに評価されている。

日本の政権交代に関して、これから中国としてどう付き合っていくかとかと考えているところだろう。戦後の日本の外交筋は、アメリカと日本との関係を常に注視してき

た。特に、日本が対米追従なのか、そうではないのかが最大の関心事。胡锦涛主席は、日本は独自の対外政策を持っているという考えで、これに基づき、安倍訪中受け入れを決断。しかし、その後、毎年総理が変わる状況には、当惑していると思う。一九八〇年代の日本は魅力があつた。だから、唐家璇や王毅のような日本留学組が出世した。今や日本の元気がないので、王毅氏も日本通というだけでは生きていけない。酒井法子はあんなことになつたが、ネットでは「アジア共通の記憶」としての評価あり。

**〈質疑応答〉**

講演終了後直ちに質疑に移つたが、多くの出席者の質問に対して、それぞれが小講演ともいえるような幅広い応答を国分氏からいただき、講演と合わせて三時間を越える充実した会となつた。

質疑応答の詳細を掲載することは紙幅の関係で困難であり、主な質問内容を列記するに留めるが、参加者の関心の高さだけでも感じ取つていただけたと思う。

- ・馬英九氏が台湾の総裁になつて中国との関係は大いに深まっているが、必ずしも合体する気はなさそうだが、この鍵を握るのは何なのか。



多くの参加者との質疑

- ・日本はインド洋の給油を止めることにした。これに代わつて中国が外交戦略上でてくる可能性はあるのか。
- ・東シナ海と尖閣列島の問題についての中国の対応について伺いたい。
- ・百万を超える軍隊や建国六十周年パレードのミサイルなどをみると、人民解放軍の統帥を共産党のトップがどのレベルまで見ているのか関心がある、先生はどのように考えているのか。
- ・内陸部の農民層の格差の問題など社会不安が大きくなるのではないかと気になるが、どうみたらよいのか。
- ・日中の学者が歴史教育の研究を進めてきたが、九月発表の予定が延期された。それに関して、日本側のメッセージの中に中国の国民が聞く面白くないような面があるのではないかと報道されているが、実際はどうなのか。

(文責) 塚本弘  
(写真) 橋本吉信

寄稿

岩倉使節団の帰国はどう迎えられるか?

三原 浩

明治四年末、横浜開港以来という盛大な見送りを受け、団員四十七名、同行した留学生を含めると百七名で出発した使節団であるが、明治六年九月の帰国は一行十数名の淋しいものであったと想像されている。果たして如何であったのか疑問に思っていたので、当時の新聞を調べてみた。( )内は筆者注。

乗客名簿

一八七三年九月二〇日付けジャパン・ウイークリー・メールに、九月五日上海発、十三日横浜着の「ゴールデン・エージ」号の乗客名簿が掲載されている。横浜出航時のメンバー十名と途中合流などの六名、計十六名の名前が見られる。乗客名簿順に左記する。

岩倉具視、伊藤博文、山口尚芳、田中光頭、栗本貞次郎(フランス公使館員)、小松濟治、杉浦弘蔵(本名・島山義成、書記官として合流)、久米邦武、市川文吉(ロシア留学)、川路寛堂、富田命保、杉山一成、チャールズ・ウオルコット・ブルックス(実記第一編七十八、三百六十五

頁参照、幕末以来のサンフランシスコ領事で、使節団に同行、来日)、山口林之助(実記第一編三百七十八頁)、マツモト(？)、相良猪吉(随行人員、泉三郎「堂々たる日本人」二百六十五頁)

以上十六名のほか、井出(井田?)上海総領事の名前などもあるが、たまたま乗り合わせたものである。

使節団帰国時の歓迎ぶり

当時の新聞記事で世間の空気を読んでみよう。

・明治六年九月九日 東京 日々新聞

「衆人の待つていたもの 大 使の帰朝 早魃の降雨」

・明治六年九月十一日 横浜 毎日新聞(要約)

「大使岩倉公をはじめ一行十五人、昨日(正しくは九日)正午既に兵庫着港の電信があつたので、明日にでも横浜に入港されよう。高貴な方の目出度い帰朝であるから、少しでも愛国心のある人は、威儀を正して、棧橋と駅の間を埋め尽くし、歓声をあげて奉祝するのが外国一般の礼である。はたして当港ではどうであろうか。なお、随行人の田邊太一、二等書記官(正しくは一等書記官)は、支那各港の視察のため上海にとどまり、帰国が遅れる由。」

・明治六年九月十三日 東京 日々新聞(原文のまま)

「江湖叢談

本日午前第八時前全権大使岩倉公及び随行人の官員横濱へ着港せり官省諸有司及諸民之を迎ふ外務省出張所於て午饌夫より第二国立銀行にて会社頭取始め饗饌を設け祝詞あり終つて午後第三時乗気車にて帰京せられたり

横浜は開化首唱の地なればこそ諸商人に至ても自ら世間普通の道理を知り斯る大切の国事を担任せる大使を饗して其労の万分に奉酬せる事其国民たるの道に負く事なきを表せるに足ると云うべし」

・明治六年九月十五日 横浜 毎日新聞(要約)

「大使御饗應の祝詞

「昨日全権大使岩倉公並びに伊藤公山口公其の他書記官等の官員一行は、外国での大役を終えられ無事着港されたので、当港商人一同の代表はご休息所を設営し、昼食を奉り、祝詞を奉呈した。大使をはじめ大変喜ばれた由、当港商人の榮譽は大であった。」

祝詞の詳細は省略するが、条約改正になれば貿易がますます盛んになり、横浜港の繁昌がなお一層盛大になると信じ、ご帰朝を奉祝するといふ趣旨で、横浜第二国立銀行、原善三郎、茂木惣兵衛、吉村幸兵衛、金子平兵衛、増田嘉兵衛、田中平八、鈴木保兵衛、大倉喜八郎の連名となつ

ている。

・明治六年九月十六日 東京 日々新聞(原文のまま)

「江湖叢談 楠社近傍旭湾漁夫よりの來書

全権大使並副使伊藤山口両公及理事官田中公其外随行人且上海領事井田公等都合拾三人長崎より米國郵船にて九月九日午後五時半神戸着港兵庫県神田公租税頭陸奥公其他共海岸へ奉迎専崎氏に御旅宿十日朝一同湊川神社へ参拝又布引の滝山神武陵遥拝所へ御拝参午後三時兵庫鉄道ステーションにて客車三輛を初て整列御試転にて西宮まで凡五里計りの間所々鉄道建築方御見分四時半返車御帰港十一日朝県庁御見分午後郵船御乗込五時出港御帰京相成る嗚呼我邦未曾有の大使節を全くして幾多の絶域異土に数度の寒暑を凌ぎ芽出度御帰朝の途中迎も先つ遥拝所と楠社とを参拝せらるる実に憂国の志気其行事を觀て知可きなり」

(○九年十二月十日記)

アルゼンチン海軍と日本海海戦の勝利

藤原 宣夫

日本海海戦での日本海軍の歴史的勝利にはアルゼンチンから購入した二隻の重巡洋艦の寄与があつたことは余り知られていない。私は二〇〇五年にオランダのヘーグにある国際司法裁判所を訪問した際



「日本海海戦 アルゼンチン観戦武官の記録」

海軍大佐 マヌエル・ドメック・ガルシア著 津島勝二訳 社団法人日本アルゼンチン協会

1898-1998 日本アルゼンチン修好100周年

にそこに鎮座する「キリスト像」の存在の理由から話しを進めたい。

十九世紀末、アルゼンチンとチリーの間では領土問題で紛争がおこり、あわや戦争になる状態にあつた時、両国の学生の懸命の努力でそれを回避した歴史がある。若者達はアンデス山脈の東と西から山を登りつめて両国の和解に努め、それに触発されて当時世

界の最強国だった英国政府の紛争解決の努力にも助けられて争いを回避出来た。キリストの像はその時の紛争回避記念として、ヘーグにある国際的な紛争を解決するべく設立された国際司法裁判所に寄贈されたものとして意味が深い。

和平成立で不要となった建設中の軍艦の再利用について、日本の海軍武官の涙ぐましいアルゼンチン大統領との折衝によって、本船獲得に奔走したロシアを退け軍艦買収に日本が成功した事が今でも語り草となっている。日本が買収した建造中の二隻の重巡洋艦(後に春日、日進)を最

### 中国、歴史と万博の旅の気運高まる

このところ本会企画の海外ツアーが途絶えていたが、二〇一〇年は是非、「上海へいこう!」という気運が盛り上がっている。

それには三つの理由がある。一つは、岩倉使節団がマルセーユから横浜への帰途、上海に立ち寄って二泊していること。第二は建国六〇年で中国初の「万国博覧会」が開催されること、第三はその万国博を仕切る日本政府の代表が当会理事の塚本弘氏であることである。



上海(上)  
瀋陽駅(下)

目下、気候のよい六月に日露戦争や満州国とも関連して瀋陽、大連、北京、上海を九日で巡るコースを検討中であり、一月中には旅程、費用など具体的なプログラムを作成したい。興味のある方は事務局にご連絡ください。ともに計画をつくりましょう!

初は英国籍とし船尾にユニオン・ジャックの旗をかざし、回航委員長に当時ロンドン駐在の鈴木貫太郎海軍武官を任命した。ロシア艦隊の追跡から逃れる為、回航業者は英のアームストロング社に依頼し、スリランカの沖合まで同行してもらった。『本艦はここで別れる。両艦が無事日本に到着する事を信じ祈っている』と信号旗を掲げながら英船は方向転換した。英国の新鋭巡洋艦『キング・アルフレッド』も日本の戦艦の護衛をし、最高速度で日本に向かった「日進」、「春日」

は、長旅で疲弊していたロシア艦隊を尻目に無事横須賀軍港に入港したのである。二隻の軍艦は日本国民の大歓迎を受け、提灯行列の歓喜で出迎えられたのはご存知の通りである。

今、日本では司馬遼太郎の「坂の上の雲」がNHKで再び放映され、日本海海戦に関心が集まっているが、当時のアルゼンチンの海軍大佐だったエマヌエル・ドメック・ガルシアは日本への本船譲渡交渉は勿論のこと「日進」・「春日」両艦に乗り組んでいた日本人将校、水兵との友情も芽生えさせ、日本海海戦の観戦武官を志願して日本の勝利の有様を克明に記し一冊の本を完成させた。元アルゼンチン協会専務理事の野村秀治(元OSK現地代表)は孫のガルシア大佐と綿密な打ち合わせをした上で、両国国交樹立百年を記念に訪日した大統領の歓迎祝賀会でこの翻訳された『アルゼンチン観戦武官の記録』が歓迎祝賀会参加者全員に贈与された。本の中には第一艦隊司令長官東郷平八郎の絶大な信頼を得た部下の一人の海軍少佐秋山真之参謀の名前も記載されている。

日本とアルゼンチンとの間にはこうした歴史の積み上げに支えられている事を「回覧の会」の皆様にお伝えしたく筆をとった次第である。  
(〇九年十二月二十日記)

### ◆会員の新书推荐◆ 西井格太郎の生涯

西井正臣

本会の会員で同姓の西井易穂氏が、七年間の調査に基づいて明治初期の近代医学の取り入れと発展に貢献された祖父の西井格太郎の生涯を楽しみ絵入りの立派な本を刊行された。ハードカバーで装丁の美しい九十頁の珍しい書物である。

西井博士は、医学が専門でビタミンDの研究では世界的権威の一人として有名な方であるが、歴史と絵画にも興味を持っておられるユニークな会員であり、この本はその三方向が一冊に集約されている。岩倉使節団のメンバーであった長与専齋が明治七年に日本の近代医学制度の方向を定めたが、それに沿った教育を受けた先人の一人が、西井博士の祖父である。若い頃の貧しさや苦学から成功までの道筋が、円山派の有名な絵師の手になる二十二騎の履歴画として西井家に残っていた。

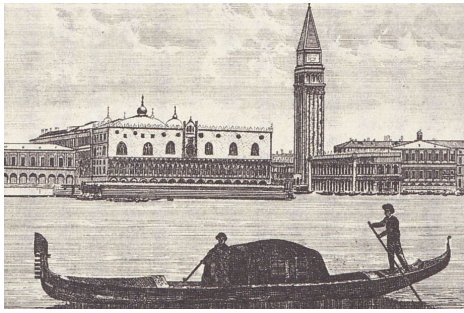
西井格太郎は苦学を重ね順天堂などで勉強して、故郷の三重に帰って開業した。全国的に有名な眼科医として財を築いたが、教育や地域開発にも貢献したようである。御木本幸吉とは同じような年頃で、若い時に苦勞し晩年に成功した者同士で友好関係を結



「近代医学への道を歩んだ西井格太郎の生涯—その履歴画を巡って」

西井易穂(著)  
風詠社 (電話06-6136-8657)  
89p/19×27cm  
ISBN : 9784434135941  
NDC分類 : 289.1  
価格 : ¥1,575 (税込)

この本は一般の書店では置いてないようで、風詠社から取り寄せの他、アマゾンドットコムや紀伊国屋書店(BookWeb)などのサイトからも注文できる。岩倉使節団に関心を持っておられる方には、政治経済の歴史の研究だけでなく、日本の近代医学の先人の苦勞を偲ぶのも一興かと思う。絵だけ眺めても楽しい本である。



旧政庁の側面とサン・マルコ教会鐘楼 (『実記』)

### 実記を読む会報告

連絡 桑名 正行

Tel&Fax 03-3642-9570

mkuwana@nifty.com



### ■ 第三百三十三回

予定日の十月八日は台風のため開催できず、十月二十九日となった。代替開催のため、予定のスイス八十六巻は後日とし、鶴飼直哉氏の「実記のデジタル実験への挑戦」とする提案が中心となった。

メンバーの中で、鶴飼探偵団と呼ばれている鶴飼氏は、実記の旅を、時に追体験しながら、久米の旅を精査し、記述の素晴らしさや正確さ、はたまた誤謬を見つけたりして、読む会でよく披露してくれる。鶴飼氏は、同時に、日頃から『デジタル実記』の必要性を強調され、デ

ジタル実記作成のマニュアルまで作っている。その鶴飼氏が『久米邦武の恍惚度指数』を發表され、話題を呼んだ。デジタル実記提唱者ならではのユニークな視点である。以下紹介する。

$$\text{恍惚度指数} = \frac{2 \times \sum Ai + \sum Bi}{\text{〇で区切られた節の行数}}$$

- A1--〇〇〇〇トシテ A2--〇〇〇〇タリ
- A3--アリ、アリ、アリ等の繰り返し表現
- A4--漢文からの直接引用
- B1--〇〇〇〇 B2--〇〇トシテ B3--〇〇タリ
- B4--難解な漢字を使った単語
- B5--その他恍惚を感じる表現

(〇〇部分は二字、四字熟語)

鶴飼さんの発明になる久米の恍惚度指数は、久米の文体を、次の数式で分析し、久米の文章の恍惚度を測る。

この鶴飼理論によると、久米の恍惚度指数は、①景色・自然描写の際に最高潮に達する。②難解な漢字の多用で、頁が黒っぽく見える。③概説や工場見学の場面には決して現れない。④恍惚感文章＝恍惚度指数一以上である。

こうして計算すると、「イス山水の記」の部分で、久

米の恍惚度指数は一・五を超え、「スエーデンの鉄道」の部分で二・〇となり、「ベネチアのゴンドラ」の部分で、最高の五・〇を記録することになる。この理論には、読む会の会員の大方の賛同が得られた。

最高点を取得した、ゴンドラの部分の三行を示すと、次の通り。

「艇の製作奇異ナリ、舳首齧起シ、艇底円転トシテ、舳ニ屋根アリ、中ニ茵席ヲ家安ンス、棹ヲ打テ泛泛トシテ往返ス、身ヲ清明上河ノ図中ニオクカ如シ、市塵鱗鱗トシテ水ニ鑑ミ、空氣清ク、日光爽ヤカニ、嵐翠水ヲ籠メテ、晴波綸紋ヲ皴ム、艇ハ雲靄香緜ノ中ヲユク、飄飄乎トシテ登仙スルカ如シ」(三行にAが三、Bが九で、恍惚度指数五・〇となる)

さて、読者の皆様のご感想は如何でしょうか。

(文責) 小野 博正

### ■ 第三百三十四回

十一月十二日開催。出席十一名。第八十九巻、ヨーロッパ政俗総論。

久米は条約済み十四ヶ国の分析をし、また欧州と支那の地勢、性質を比較する。そして、この実記の総括とも言うべき、人種、言語、宗教、政体の分析にいたる。いわゆる「白種(コーカソイド)は情

欲の念さかんに、宗教に熱中し、自ら抑制する力乏し。欲深き人種なり。黄種(モンゴロイド)は情欲の念薄く、欲少なき人種なり。西洋は保護の政治、東洋は道德の政治をす」と。

さて、当章の人種、言語の分析については、今年一月に、別途「世界言語樹」、「人類文明五千年をみる」、「日本語(人)の流れ図」などで報告したので、今回は政治体制、宗教について、独断と偏見(?)に基き詳細報告した。政治体制については、主要六ヶ国の五百年の歴史を「主権在民への曲がりくねった道」と題して図示。宗教については、「二神教と多神教」、そして「人は何を信じてきたか、人はどう生きればいいのか」を、古来の神話、宗教、哲学の具体的文言をたど

k=博「帛帖・羈靴靴討澆拭・錫鮓 具体的には、ギルガメッシュ叙事詩(シュメール)、エジプトの神、ギリシャ神話、リグ・ブエーダ(バラモン、ヒンズー)、初期仏典(パーリ語原典)、ゾロアスター教(ニーチェのツアラストラ)、旧約聖書(創世記、コーヘレト書)、新約聖書(マタイ、マルコ、パウロ書簡、トマス外伝)、コーラン、そして、欲望全開型社会の問題多発せる今日、「知



ライデンの運河と河岸 (『実記』)

足型社会」へのヒントとなる、老子(TAO)、ストア哲学(セネカ、マルクス・アウレリウス)城山三郎(「無所属の時間で生きる」)を、みんな読んで読んだ。また、サモアの(米)欧回覧実記ともいうべき「パラギ」を、現代文明へのアンチ・テーゼとして紹介した。

(報告者) 芳野 健二

### 英訳実記を読む会報告

連絡 岩崎洋三

Tel&Fax 03-3488-0532

iwasaki-yz@jcom.home.ne.jp



### ■ 第七十六回

十一月月二十六日開催、出席者七名。第三巻第五十章ハーグ、ロッテルダム、ライデンの記。

オランダには都合十二日間滞在した。王ウリヤム日世謁見や外務宰



深津真澄氏(歴史部会)

相主催レセプションに出席した他、造船所、海軍所、博物館等を見学している。ライデン訪問は、長崎に五年間滞在経験のあるポンペイ医師が案内し、ライデン大学博物館でシーボルトが日本から持ち帰った動植物標本を見たことなどが記述されている。造船所見学でジャワ国政府発注の船を見た際に、オランダが東インド会社により経営してきた植民地インドネシアの実情を詳述し、米作よりも砂糖・コーヒー・胡椒等換金作物が優先されたことを指摘されているのは興味深い。

英訳の適否に関しては誤訳が少なくない一方、日本人専門家も「オランダの中心」と誤読していたりする難解な漢語「鄒魯」を「学問の中心」と正しく訳していたり、工作の要に関わる込み入った表現をこなれた英語に置き換えた目だつた。

(文責) 岩崎洋三

### 歴史部会報告

連絡 小野 博正



mi040031-9697@tba.t-com.ne.jp

■講演会 帝国主義日本の外交  
—小村寿太郎と加藤高明の足跡—

十一月十六日開催、参加者十六名。歴史人物シリーズとして、小村寿太郎と加藤高明をテーマとした講演

会を行なった。講師は元朝日新聞社論説委員、ジャーナリストで近著『近代日本の分岐点—日露戦争から満州事変前夜まで—』で石橋湛山賞を受賞した深津真澄氏。

深津氏の論点は、湛山賞を得た著書の巻末付録に、石橋湛山の『大日本主義の幻想』を添付したことで判るとおり、石橋湛山の小日本主義の系譜に属し、なぜ、明治日本は大日本主義に傾斜したのか。今も、日本はその大国主義から脱却できているのにかにある。明治末期に、交互に何回か外務大臣となり、日露戦争で満州権益と南樺太を獲得、韓国併合を主導した小村寿太郎と、第一次世界大戦参戦により独領南洋諸島を獲得、対華二十一カ条要求で満蒙権益拡大に走った加藤高明の二人の時代と、その軌跡が「大日本帝国」形成に、大き

な役割を担ったことにより、近代日本の分岐点ともなったという。

ふたりの帝国主義へ傾斜の背景には、外相として欧米と渡り合ううちに、一八九八年前後の列強による容赦のない中国分割競争の目撃者であったことがあげられる。リアリズムの外交を迫及しなれば、日本もいつかは列強の餌食になることへの恐怖感だ。

(独の青島九十九年租借、露の旅順・大連、英の威海衛と九竜半島、仏の仏印進出の例)

小村はロシアのシベリア鉄道完成前に日露戦争の早期開戦を主張、日本海海戦後、講和交渉材料として樺太占領作戦に賛同。講和条約の全権を自ら引き受け、帰国後、鉄道王・ハリマンと桂首相間で仮調印した満鉄共同提案を葬る。そして、日清満州善後協約締結により、ロシアの権益を法的に引き継ぐと共に、韓国併合を断行、満州独占と満韓一体開発を目指す。日英同盟、桂・米タフト協定、日露協約には、外交官の粋を尽くし綿密、周到を極めた。小村はラット大臣といわれるほど小柄で、身長百四十三センチ。外相二回、七年余。天皇制官僚、政党政治家で、長州閥(山県・桂)へ献身した。妻は美人だが悪妻で家庭的に

は不幸だったという。

一方、加藤は四回外相を務めたが、何れも短く通算で2年間。三菱・岩崎の三女を妻に持つエリート気負いもあつた。背は高く、インドの貴族の綽名も。第一次大戦に強引に参戦、対華二十一カ条要求に続き、山東半島権益確保に走つた。然し、二十一カ条の失敗もあり、元老から忌避された。後半は、変身して、第一次世界大戦後のデモクラ

シー高揚に乗り、普通選挙要求に同調、シベリア出兵反対、朝鮮自治論に傾き、憲政会党首をバックに、加藤内閣を実現、外相に、平和外交、中国非干渉を主張する穏健派の幣原喜重郎を起用し、小村外交、幣原外交、吉田外交の三大外交の基礎も築く。後継者として、若槻礼次郎、浜口雄幸を育てたのも加藤である。

五歳違いの、小村と加藤は幕末生まれで、維新第二次世代、協力者でもあり、ライバルでもあつた。ふたりには、首相を凌ぐほどの、外交を主導する腕力があつた。

日本は、列強の帝国主義をまねかないで、中・韓の権益に拘らず、英米との同盟を中心にしてきたか。詮無い詮索であろうか。

(文責) 小野 博正

### 関西支部報告

連絡 難波 康熙



namba@jttk.zaq.ne.jp

■第四十八回  
九月二十八日開催、出席者十五名。輪読は、英国編第二巻・三十三頁から。

一八七〇年代初めの英国は、成熟した産業国家、貿易大国、経済

大国として眩いばかりに輝き、新興日本にとって目標とする国家であつた。一方では英国の工業力の優位は新興の独逸や米国に脅かされるようになりつつあり、大きな転換をやがて余儀なくされる状況にあつた。一行は、英国の繁栄と安定した豊かさという光の部分に眼を奪われていただけでなく、それをもたらした勤勉努力、人々のシベリアさへの観察も怠つていない。

当時の英国の状況は「追いつかれる覇権国」で、繁栄の絶頂にあると同時に大きな転換点にもあつた。その背景や理由を議論し、「産業競争力の低下による自由貿易主義から帝国主義への転換」、「農業生産の低迷」、「経済成長および工業の停滞とデフレ経済への移行」の三点が話題となった。まれてきた。

(文責) 難波 康熙

特定非営利活動法人  
「米欧亜回覧の会」ご案内

**趣旨** この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。  
この歴史的な大いなる旅と「実記」は、まさに「温故知新」の宝庫といえましょう。  
この素材を媒体に歴史を学び、現代の直面する諸問題についても自由に語り合う会です。

**会員** 趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

**例会** 年に4回、全体例会があります。

**部会** テーマ別に読む会、歴史、現未来部会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。

**機関紙** 年に4回、機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

**役員** 理事長(泉三郎)他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。

**会費** 年会費6,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、学生、仮入会希望者には地方会員、準会員、学生会員の制度もあります。

**事務局** 「米欧亜回覧の会」  
〒112-0006  
東京都文京区小日向 2-26-3 山田方  
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp  
TEL:080-6612-1101 FAX:043-238-6690

**入会申込**

入会申込書は事務局にあります。新規入会に際しては入会金5,000円を頂きます。  
なお年会費などのお支払は郵便振込が便利です。  
00180-2-580729 特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

**ホームページ**

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ等  
また、書籍・DVD案内もあります

<http://www.iwakura-mission.jp>

\*お知らせ欄も時々チェックしてください



**<催し案内>**

2010年1月～2月の予定です

**☆新年懇親例会**

日時: 1月19日(火) 18:30 開宴(開場18:00)  
テーマ: オランダ  
場所: レストラン・アラスカ  
日本プレスセンタービル10階  
会費: 8,000円  
その他: 服装はセミフォーマルでお願いします

**☆実記を読む会**

日時: 1月14日(木) 15:00～  
2月10日(水) 15:00～  
場所: 国際文化会館  
会費: 1,000円

**☆英訳実記を読む会**

日時: 1月14日(木) 18:30～21:00  
2月18日(木) 18:30～21:00  
場所: 国際文化会館  
会費: 1,000円

**☆歴史部会・歴史人物シリーズ**

- ①陸奥宗光  
日時: 1月27日(水) 18:00～21:00  
講師: 永富邦雄氏
- ②三井八郎右衛門高棟と団琢磨  
日時: 2月22日(月) 18:00～21:00  
講師: 由井常彦氏  
場所: 国際文化会館  
会費: 1,000円

**☆関西支部**

日時: 2月27日(土) 13:00～16:30  
テーマ: 第49回例会  
場所: 大阪弥生会館

**★2010年・歴史ツアー計画中★**

～中国、歴史と万博の旅～

6月頃に瀋陽、大連、北京そして万博開催中の上海を9日間で巡る、海外歴史ツアーを計画しています。

(詳しくは5ページ参照)

**編集後記**

◇今号は、該当する部会の数が少なく、心配していましたが、シリーズ企画となりつつある会員の寄稿で乗り切ることができました。一般のメディアでは読むことができない、会員ならではの研究や近代史の秘話という大変興味深い原稿をニュースで全会員に公開することができました。三原氏、藤原氏の両氏、急遽の執筆依頼に応じたいただき感謝いたします。  
◇台風で延期となった十月の「読む会」は、同月に代替開催され、鶴飼氏の「久米邦武の恍惚指数」という誰も思いつかないユニークな発想が披露されました。縦書きのニュース記事にするのに苦労しましたが、の算出方法は理解できました。同じく鶴飼氏が提唱する「デジタル実記」については記事では十分に伝えることができませぬ。興味のある方は「読む会」にご参加ください。  
◇「上海万博ツアー」企画の気運が盛り上がってきました。かつて毎年のように行っていた当企画ツアーは、二〇〇六年五月の「薩摩歴史ツアー」以来途絶え、海外となると二〇〇二年十月の「イタリアツアー」以来となりま